

三木露風と宮沢賢治の文学的交流

近藤 健史

はじめに

三木露風（一八八九～一九六四年）と宮沢賢治（一八九六～一九三三年）は、同時代に生きた。しかし、これまでは二人の文学的交流関係や着想の近似性についての言及は、ほとんどざられていなかった。

ところが近時、兵庫県たつの市霞城館所蔵の「ノート24・日記及び書簡」(大正十一年の日記と大正十三年の書簡)の「千九百二十四年 書簡」と分類された中に、二人の交流を示す書簡控えの存在が確認された。露風は、作品の草稿、題名、寄稿先、書簡の内容や宛先などを丁寧にノートや手帳に書き留めている。賢治宛の書簡控えは、いわゆる「自筆ノート」の「ノート24」と呼ばれるものがあった。

本稿は、この度発見した新資料の書簡控えを基に、露風と賢治の文学的交流について考察したものである。

一、露風から賢治への書簡

発見された露風の書簡控えは、次のような内容の献本に対する礼状である。

四月廿五日

岩手県花巻川口町

宮沢賢治

御清著「春と修羅」及び御書面をお／受取致しました喜んで御受容れます。

君が其御序文中に於て自分といふ者／が現象で電流体の青き照明である／と観られてゐることに就て私は善／い賞讃を惜まぬ者であり又屈折／率、くらかけの雪、日輪と太市等の／詩はいづれも善い詩情を有つてゐ／るものと思ひます。

右御受迄 草々

『「心象スケッチー春と修羅」は、賢治が初めて刊行した作品集である。実際は自費出版であるが、一九二四（大正十三年）年四月二十日に東京関根書店から刊行された。露風の書簡の日付は、刊行から五日後の二十五日である。とすると賢治は、刊行されてすぐに『春と修羅』に書簡を添えて贈呈したことになる。このやり取りの時間的な短さには、賢治の初出版に対する意気込みと、露風の謹直、誠実な性格がうかがわれる。

内容的には、難解な序文に理解を示し、冒頭部の詩三篇について「善い詩情」を持つっていると賞賛して、賢治に感謝の気持ちを示している。

この頃の露風は、北海道トラピスト修道院のジェラルド・プウイエ（後帰化して岡田普理衛）院長の招きで一九二〇（大正九）年五月二十七日から一九二四（大正十三）年六月まで、修道志願者などに文学概論や美学概論を教える講師として赴任していた。修道院では、午前中は授業に出かけ、その他は自然を楽しむことを悦びとし、祈りと読書、思索、執筆の生活を続けていたという。三年目の一九二二（大正十一）年に洗礼を受けてからは、時に依頼を受けて修道院を出て講演をしていた。自然に囲まれた環境にも慣れ、新生活では着任した一九二〇（大正九）年の七月から創作活動を始め、詩集『生と恋』『蘆間の幻影』を出版する。翌一九二二（大正十一）年には『牧神詩集』や童謡集『真珠島』、一九二二（大正十一）年には『象徴詩集』『信仰の曙』『青き樹かげ』、一九二三（大正十二）年『小学生の歌』唱歌集四巻と相次いで出版している。

賢治から献本のあった一九二四（大正十三）年頃は、露風の苦難の時期であった。一九二三（大正十二）年十二月頃より一時精神に異常を来し、翌一九二四（大正十三）年には修道院において納得のいかなない人事があり、ついに同年六月三十日に辞職し上京する。このような状況の四月末に、心象の有様を直視し記録した「心象スケッチ」の副題を持つ『春と修羅』が届いたのである。

露風は、この頃多くの詩書の寄贈を受けていた。そして全国に実力ある詩人が増加したことを知って「詩壇の隆盛」を感じ、これまでの詩壇の成果として喜んで¹⁾いる。

近來、詩書の寄贈を受けることが甚だ多く、多きは数日連続して来り、又一日に数冊を受け取ることもある。斯様なことは十年、二十年前の詩壇には無かつたことである。又此頃の新聞新刊紹介欄などを見ても、詩集の批評紹介は比較的多く、又批評家もそれを重んじて紹介してゐる趣が見られる。大概は自費出版であるが、とにかく、詩が一般的に弘まり、多くの人々が詩作をするのを日常茶飯の事と考へるやうになつた観があるのは愉快である。長い詩壇の経緯が、今日の此弘布時代を生み出したので、これを思ふと私達のやうに二五六年前から詩作してゐる人間には、劃期的な感じがあり、又苦処して来た成果が詩壇の上に表はれたのを悦ぶ心が切である。現在の詩壇には有力な雑誌が乏しいけれども、而かも全国に、可成り実力の有る詩人が斯くの如く増したことは詩壇の隆盛を語るものだ。

露風は、賢治から献本された『春と修羅』についても快く読んだのであろう。書簡の文面に「詩」とあり、露風も他の人と同様に『春と修羅』を詩集として享受したようである。

二 『春と修羅』の行方

『春と修羅』は、奥付に大正十三年三月廿五日印刷、大正十三年四月二十日刊行、定価貳円四拾銭、著者宮沢賢治、発行者関根喜太郎、印刷者吉田忠太郎、発行所関根書店とある。印刷者の吉田忠太郎は、盛岡山口活版所の工人であり、花巻停車場通りにある花巻支店の花巻大正活版で印刷された。発行所は、東京京橋区の関根書店

とあるが、実際は多くの無名詩人と同様に自費出版である。

発行者の関根喜太郎は、「ケチネ」とあだ名がつくほどのケチンボウだったという。彼に関して、生前の賢治と深い親交があった盛岡出身の作家森壮巳池は、のちに十字屋書店版宮沢賢治全集を刊行した酒井嘉七から聞いた話を伝えている。²⁰

『春と修羅』を発行した関根喜太郎サンは、神田の書店組合長だったが、ひどいケチンボウで「ケチネ」と仇名（あだ名）があつたと聞かされた。「なぜ関根に宮沢サンが頼んだのでー」と聞くと、「組合長だからではないんですか」と答えた。「おもしろいですね。宮沢童話そっくりですネ」と私が言うと、「さあ組合長も、売れる本だとは思わなかったでしょうが、委託販売ということで、何冊か販売を依頼されたのでしようネ」と、言うことであつた。

この「ケチネ」は、単なるケチではなかった。彼の本名は、関根喜太郎、別名関根康喜、荒川畔村である。関根康喜の名では、一九三五（昭和十）年代に経営する出版社の成史書院から『層の話』『物資の回収』『廃品回収及更生品』『紙（資源愛護読本）』などを出版した、いわゆるリサイクル運動の推進者であつた。また、荒川畔村は、一九一八（大正七）年に宮崎県で作家の武者小路実篤とその同志により理想郷をめざした「新しき村」に参加、その後離脱し、一九二〇（大正九）年に日本社会主義同盟に加つた人物である。関根喜太郎は、新しき村運動、出版業界、アナキズムへの接近、転向して成史書院に至つたのであろう。²¹ 賢治の『春と修羅』は、この

過程において大正十三年に本名の関根喜太郎での出版であつた。

また森壮巳池は、一九二五（大正十四）年に、『春と修羅』が神田の古本屋ではなく夜店の古本屋にゾッキ本に交じつて売られていたことを記している。²²

関根書店の「春と修羅」は、古本屋の市場で売りさばかれた。私が「岩手詩人協会」をつくったとき、賢治は機関誌の「貌」の刊行費にと、「春と修羅」と「注文の多い料理店」を三十冊ずつくれた。私は、それをどうすれば、売れるのかを知らない中学生だった。賢治は「会員の皆さんに、買って貰つて『貌』の印刷費にするといいでしよう」と、言ってくれたのだが、——。私より世智（せち）にたけ、岩手県庁の職員だった相棒の生出桃生も、上京した。私は上京するとき、「春と修羅」を売って、「貌」の印刷費を作ろうと、東京に運んだ。だがケチネ氏が、売り払った大量？の、「春と修羅」が、二十銭、三十銭で、神田や本郷、新宿などの夜店の古本屋に、二、三ずつ出回つていたので、驚いて皆寄贈してしまった。いずれ当時の有名無名詩人たちに送つたものと思うが、名簿もないので全く不明である。

その夜店の本屋で買った一人に、詩人中原中也在がいる。大岡昇平は「彼は富永太郎と共に、宮沢を早くから認めていた一人で、夜店で五銭で売っていた『春と修羅』のゾッキ本を買い集めて、友人に送っていた」という。²³

大正十四年二月九日、花巻農学校教師をしていた賢治は、盛岡在

住の森佐一（前出の森壮巴池）に依頼された雑誌『貌』への寄稿を断るための書簡を送っている。それには『春と修羅』の方針として「書き付けてあるもの」は「詩」ではなく「心象スケッチ」であると語っている。また「私はあれを宗教家やいろいろな人たちに贈りました。その人たちはどこも見てくれませんでした。『春と修養』をありがたうといふ葉書も来てゐます」と、献本したものの想定外の読まれ方をされた不満を伝えている。⁶⁾

このことに関して、『注文の多い料理店』の装丁と挿絵を手掛けた菊池武雄は、次のように回想している。⁷⁾

春と修羅の出来た當時のこといろ／＼関係のあつた先輩や友人に記念として本を贈呈した。幸に中央では辻、佐藤の両大家が大きい問題にしてくれて新聞などにも激賞の文字を載せて下さつたりしましたが、國の方ではヒソソリとして反響の無いこと夥しい無論賢治さんも「どうせ自分だけの気持ちで勝手にスケッチしたんだから外の人には解らない筈だ」といつて居られたけれども―それにしてもあんまりだと思はれるのは、當時郷里の某女学校の校長といふ人からの贈本の御禮に「―過日は春と修養お贈り下され有り難く拜見時節柄（其の頃丁度春でした）好適の書と存じ云々」文句は忘れたが何でもこんな意味の鄭重なる禮狀、これには賢治さんもすつかり參つたといつて笑つて話したことがあります。

『春と修羅』の行方について知っている友人はもう一人いる。賢治の生涯の友で『セロ弾きのゴーシュ』のモデルと言われている藤

原嘉藤治である。嘉藤治は、一九二二（大正十）年九月に県立花巻高等女学校に音楽教師として赴任、十月二十六日に稗貫郡稗貫農学校（のち県立花巻農学校）に赴任した賢治と出会い、賢治が亡くなるまで十二年間親交を深めた。音楽だけでなく文学的才能にも優れていた嘉藤治は、賢治に『春と修羅 第二集』の出版を勧め、没後には『宮沢賢治全集』の編纂に携わっている。

ユニークに富む嘉藤治は、当時を回想して『春と修羅』の読まれ方や行方について次のように述べている。⁸⁾

自費出版の一〇〇〇部のほとんどが、先輩や知人、友人に寄贈され、一部分は定価販売されたらしいが、当時果たして何人に読まれ、或は受読され、味読、理解されたことか。贈呈先の名簿でも残っていたら（勿論記録してない）面白いことになる。

私も五冊もらったが、一冊は先輩の手塚善助に、一冊は後輩の瀬川信一に、一冊は自家用とこの三冊だけが行先あきらから、あとの二冊は誰に贈ったか行くえ知れず。勿論、無差別に、安易に送つたつて、序文にでくわして、お手あげ、後は読んでもわからないのが普通。さてさて誰にやつたかな。たつた五冊の運命さえ、この通りなのに、何百冊は、どこにどう落ち着いて、保存され、焼失、紙屑屋へと流転、消滅したことやら。

筆名を藤原草郎として岩手の文学界で活躍していた嘉藤治は、三木露風とも縁がある。一九一五（大正四）年三月、中央の芸芸雑誌『文章世界』（博文館、第十卷第三号、三月号）に詩「春」を投稿し

て佳作として掲載されている。この時の選者が露風であり「温かな情緒があつて心を牽く」という選評がある。詩を評価された嘉藤治は、賢治に『春と修羅』を有名な詩人露風に贈呈することを勧めたのかもしれない。

友人たちは『春と修羅』の販売に手を尽くしたが、多くの在庫を抱えた。そこで賢治は、一九二五（大正十四）年十二月二十日岩波書店の店主岩波茂雄に宛て手紙を書いた⁹。だが、その提案は効果が無かつたようである。

本は四百ばかり売れたのかどうかどうなつたのかよくわかりません。二百ばかりはたのんで返してもらひました。それは手許に全部あります。

わたくしは渴いたやうに勉強したいのです。貪るやうに読みたいのです。もしもあの田舎くさい売れないわたくしのほんとなんかあなたがお出しになる哲学や心理学の立派な著述とを幾冊でもお取り換へ下さいますならわたくしの感謝は申しあげられません。わたくしの方は二、四円の定価ですが一冊八十銭で沢山です。あなたの方は勿論定価でかまひません。

賢治の初めて刊行した『春と修羅』は、有名無名詩人たちや「先輩や知人」「友人」「宗教家」に贈呈されていた。また、教え子に賢治本人が直接贈つたものとしては、花巻農学校の教え子である「桜羽場寛君」に「大正十三年五月十三日」と署名して贈つたこと、一九三二（昭和六）年に、賢治を師と慕っていた松田甚次郎（昭和十三年『土に叫ぶ』著者）に手紙を添えて贈つていたことが知られ

ている。

明治大学泉図書館には「大正十三年五月十七日著者殿寄贈」と寄贈印のある初版本が所蔵されている。一九二三（大正十二）年九月一日、東京は大震災により大きな被害を受けた。駿河台にあった明治大学図書館は、多くの蔵書を失つたため国の内外に向けて図書の寄贈を呼び掛けたという。おそらく賢治は、それに応えて寄贈したのであろう。

一九二四（大正十三）年八月の『明治大学学報』（第九十三號）にある「図書館報告」欄に寄贈新刊書として『春と修羅』が、次のように紹介されている¹⁰。

詩集春と修羅 宮澤賢治著

新しい詩人の處女詩集である。著者の科學に對する深い造詣と相俟つて奔放なユニークな詩風を持つてゐる。之れがもつと統一され、放散から集中に至る道程の上で、作者は大にも小にもなると思はれる。（關根書店二四〇）

賢治は、科學に造詣が深く伝統や慣習にとられないユニークな詩風を持つ新しい詩人として紹介されている。残念ながら新刊紹介の効果は少なく、『春と修羅』の多くは夜店の古本屋で売りさばかれていたのである。

現在確認できる『春と修羅』が贈呈されたなかでは、露風の献本への礼状の日付（大正十三年四月二十五日）から判断して、露風への献本が最も早いといえよう。

三 露風による『春と修羅』「序」の評価

露風の礼状は、『春と修羅』刊行日の五日後の日付であった。この刊行日を基準に考えると、露風は熟読する時間は少なかったと思われるが、どのように評価したのであるか。

まず露風は、難解と言われる『春と修羅』の「序」について触れている。「君が其御序文中に於て自分といふものが現象で電流体の青き照明であると観られてゐることに就て私は善い賞讃を惜しまぬ者」であるという。

『春と修羅』の「序」は、詩を思わせる形式で書かれていて、一般的な序文とは異なっている。「詩集」とせず「心象スケッチ」と銘打つたように、新しい形式の「序」にも賢治の意気込みが感じられる。それはまた、読者に対して『心象スケッチ―春と修羅』の本質を前置きとして語りかけているといえよう。その冒頭は次のようにある。

序

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんないつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち、その電燈は失はれ)

(以下省略)

「序」は、自然科学用語を多用していることもあり難解で諸説紛々である。たとえば、この冒頭部は賢治の内面と電燈との結びつきを、また「心象スケッチ」の構造原理を濃厚に示しているとして、次のような解釈がある⁽¹⁾。

自己存在は有機物で組織される肉体という電燈によって支えられる現象 \parallel 照明である。自己存在の本質は、いつか失われる肉体にあるのではなく、それを媒介として行われる現象 \parallel 生にある。そしてその生は、因果によって他の肉体を得ることによって永遠に保たれる。このようにして自己存在は、電流 \parallel 法(仏教でいう統一原理)によって、過現未という時間軸上の、また現在という空間軸上の全存在とつながっているひとつの現象なのである。要するに、心象スケッチとは、全存在とつながる「わたくし」の心に生起する一切の現象をとらえたものであり、それは「法」をとらえるための手段であるということになる。

「序」の最初の四行は、端的に言えば、「わたくし」という実存的現象は、たとえば仮に置かれた有機体であり、かつ交流電流の流れる電燈がせわしく明滅し青い光を放って燈り続けているようなものという意味である。「わたくし」は、ひとつの「現象」であり、譬えるなら「電燈」であり「明滅」する「青い照明」である、つまり

生命体である「わたくし」は「交流電燈」（一定の周期で流れの方向が変わる電流に灯った電燈）であり、「透明な幽霊の複合体」（すきとおって目に見えない精神作用のいろいろと組み合せてきたもの）であるというのである。

露風は、この「序」について「君が其御序文中に於て自分といふものが現象で電流体の青き照明であると観られてゐる」と理解し賞讃している。書簡で使われている「電流体」の語は、以前に露風が詩論「冬夜手記」（大正元年十二月十三日記）において、詩人についての表現に使用している。¹²ここでの「電流体」は、詩を創造する詩人と同質のものであり、物事の本質を見抜く「洞察者」と並ぶものである。

最良の詩人は永遠の洞察者である。永遠の電流体である。

おそらく露風は、「わたくし」は「現象」であり、有機・因果の「交流電燈」であるとする賢治に共感を覚え、書簡で詩人賢治を「電流体」と表現したと思われる。それは『春と修羅』を読んだことで賢治を「最良の詩人」と評価してのことであり、「善い賞讃」を惜しまぬと礼状に書いたのであろう。

実はこの「電流体」の語は、萩原朔太郎の『月に吠える』（大正六年二月）にある二つの序文にも使われている。¹³

最初は、北原白秋の「序」である。「大正六年一月十日 葛飾の紫烟草舎にて」と記していて、露風の「冬夜手記」より四年ほど後の執筆である。白秋は、朔太郎の生まれつき持っている気質について「君の気稟は又譬えば地面に直角に立つ一本の竹である」といい、

そこから「電流体の感情」によって「詩」を生み出すとする。それは、次のようにある。

外見的に見た君も極めて瘦せて尖っている。さうしてその四肢が常に動く、まさしく竹の感覚である。而も突如として電流体の感情が頭から足の爪先まで震はす時、君はぴよんぴよん跳ねる。さうでない時の君はいつも眼から涙がこぼれ落ちさうで、何かに縋りつきたい風である。

潔癖で我儘なお坊ちゃん（この点は私とよく似てゐる）その癖寂しがり、いつも白い神経を露はに顫へさしてゐる人だ。それは電流の来ぬ前の電球の硝子の中の顫へてやまぬ竹の線である。

君の電流体の感情はあらゆる液体を固体に凝結せずんばやまない。竹の葉の水気が集つて一滴の露となり、腐れた酒の蒸気が冷たいランピキの玻璃に透明な酒精の雫を形づくる迄のそれ自身の洗煉はかりそめのものではない。君のセンチメンタリズムの信条はまさしく木炭が金剛石になるまでの永い時の長さ、一瞬の間に縮める、この疑念の強さであらう。摩訶不思議なる此の真言の秘密はただ詩人のみが知る。

また、続く萩原朔太郎の「序」には、次のように使われている。

詩は一瞬間に於ける靈智の産物である。ふだんにもつてゐる所のある種の感情が、電流体の如きものに触れて始めてリズムを発見する。この電流体は詩人にとつては奇蹟である。詩

は予期して作らるべき者ではない。

以前、私は詩といふものを神秘のやうに考へて居た。ある靈妙な宇宙の聖靈と人間の叡智との交霊作用のやうにも考へて居た。或はまた不可思議な自然の謎を解くための鍵のやうなものにも思つて居た。併し今から思ふと、それは笑ふべき迷信であつた。

(中略) 詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。

これは、「序」の冒頭部で述べる「詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である」に関連する説明である。「電流体の如きもの」に「ある種の感情」が触れ「一瞬間に於ける靈智」により詩が生れる。「電流体」は詩人にとって不思議なものであり、詩は予期せずして生まれるという。しかし、詩の神秘や象徴を否定するのである。

宮沢賢治が、『月に吠える』に刺激され強く反応したことは知られている。賢治は、妹トシの看病のため上京中の一九一九(大正八)年一月頃に、盛岡中学同窓の友人阿部孝(東京帝大文学部在学中、後に高知大学学長)の下宿を訪ねた。そこで朔太郎の『月に吠える』に出会い感銘を受けている。阿部によると、賢治が「ふしぎな詩だなあ」といいながら「目が異様な輝きを帯びてくるのを」見たので詩集を貸したという。その一年ほど後、『春と修羅』の詩の原稿を見た阿部は、直観的に「ばかに朔太郎張りじゃないか」というと「凶星をさされた」と言つたと伝えている。賢治の絵画は、朔太郎の挿絵の投影があることも知られている。

この「交流電燈」についても『月に吠える』に見える白秋・朔太郎の「電流体」の投影、修辭的近似性がうかがえる。賢治は、朔太郎が「電流体」から生じる詩は神秘でも象徴でもなく、「病める魂の所有者と孤独者の寂しいなぐさめ」としたことに着想を得て、そのような「わたくし」は「現象」であり、たとえるなら「交流電燈」としたと思われる。前掲の朔太郎の「序」と賢治の『春と修羅』「序」における当該部分を傍線で示すと次のようである。

わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体)

(中略) 因果交流電燈の／ひとつの青い照明です

(中略) これらについて人や銀河や修羅や海胆は／宇宙塵をたべ 又は空気や塩水を呼吸しながら…

時系列的に整理すると、露風「電流体」(『冬夜手記』大正元年十二月、『白き手の獵人』大正二年所収) ↓ 白秋「電流体」(『月に吠える』「序」大正六年一月十日記) ↓ 朔太郎「電流体」(『月に吠える』「序」大正六年二月十五日) ↓ 賢治「交流電燈」(『春と修羅』「序」大正十三年四月二十日) ↓ 露風「電流体」(『賢治宛書簡』大正十三年四月二十五日) である。

このことからすると露風と賢治の着想の近似性があるといえよう。だが、この頃の露風、白秋、朔太郎の関係は、端的に言うとき微妙な関係であつた。大正四、五年頃までは、露風は白秋と並んで「白露時代」と呼ばれ詩壇の双璧と称されていた。また朔太郎は、『月に吠える』の刊行後、大正六年五月に「三木露風一派を放逐せよ」(『文

『章世界』五月号)を發表して、露風や露風一派の詩を古臭いと批判・攻撃し象徴主義論争の口火を切っている。

露風、白秋、朔太郎などの詩人にとって「電流体」は、詩を生み出すのに欠かせないものという共通認識があったが、朔太郎に刺激された賢治は特異な個性で新しい語を創作したといえよう。

四 露風による『春と修羅』冒頭詩三篇の評価

露風は、『春と修羅』の「序」の次にある三篇の詩、「屈折率」「くらかけの雪」「日輪と太市」について「いづれも善い詩情」と持っている」と讃える。この三篇の「心象スケッチ」の形式は、口語自由詩と類似する。

屈折率

七つ森のこつちのひとつが
水の中よりもつと明るく
そしてたいへん巨きいのに
わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ
このでこぼこの雪を踏み
向ふの縮れた亜鉛の雲へ
陰気な郵便脚夫のやうに

(またアラツデイン、洋燈とり)

急がなければならぬのか

くらかけの雪

たよりになるのは
くらかけつづきの雪ばかり
野はらははやしも
ほしやほしやしたり黝んだりして
すこしもあてにならないで
ほんたうにそんな酵母のふうの
朧ろなふぶきですけれども
ほのかなのぞみを送るのは
くらかけ山の雪ばかり

(ひとつの古風な信仰です)

日輪と太市

日は今日は小さな天の銀盤で
〔雲〕がその面を
どんだん侵してかけてゐる
吹雪も光だったので
太市は毛布の赤いズボンをはいた
またまつしろに雪がふつてゐるとき

青ざめたそらの夕がたは

みんなはいちれつ青ざめたうさぎうまにのり
きらきら金のばらのひかるのはらを
犬といっしょによこぎって行く

青ざめたそらの夕がたは

みんなはいちれつあおざめたうさぎうまにのり

露風は右の三篇の題名をあげて、「いづれも善い詩情」があると賞賛した。この「詩情」とは、曖昧で定義しにくいものである。辞書的には「詩に詠まれた感情、また詩に表したい感情」などという。例えば、夕焼けの赤とんぼを見て美しく感じると感じるもの、感じさせ、感動させる心の状態であろう。人々が有していて、あるときには詩に姿を変え、あるときには絵画や音楽という形になり得る。

賢治は、大正十四年二月九日付の手紙で、友人の森佐一に『春と修羅』の「序」と「詩」の関係について、「序文」に書いた考えを『春と修羅』の作品に主張したと伝えている。¹⁵⁾

私はあの無謀な「春と修羅」に於て序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです。

さて賢治の詩を評した露風の「善い詩情」とは、具体的にはいかなるものだったのか。そこで露風の詩論において「詩情」について確認してみたが、数少ない用語であった。管見によれば、露風は「自由詩運動の最初」という論述において「詩情趣味」「詩情主義」と批判的に用いている。¹⁶⁾新しい詩が日本に生まれていった経路について、自然主義が詩の上に影響をもたらした良い一面として「明治の新体詩臭味を破ってしまったこと」と「つまらぬ修辭や形式の旧衣

を棄て、序にその、詩情趣味を破ってしまった」ことを挙げている。次いで詩が革新された点について述べたところでも用いている。

私達の考へたことは「自己を歌ふ」といふことであつた。明治の詩はそれまでの一種の詩情趣味に囚はれてゐた。たとへ自己を歌つても真に自己を歌ふことは稀で月並な詩情に左右せられてゐた。『明星』などは月並ではなく余程新しいところを持つてゐたのであるが、要するにその守るところは詩情主義の外に出でなかつた。

さらに薄田泣重と蒲原有明も「詩情主義に囚われている」という。対して岩野泡鳴は「根柢に自己を歌ふといふ態度があつた」と説く。ここでの「詩情」は、自由詩運動から見た「自己を歌わない」明治期の「旧衣」をまとつたものといえよう。

では露風の「善い詩情」というところの「善い詩」とは、どのような詩であろう。露風は、「詩を作る年少の友」と題して詩を作る若い人に「心の動き」と「発想力」の重要性を説き、この発想力は「我」の呼吸であるという。心の動きに従い自分が歌うことが大事であり、物に心を動かして真に歌つた作品が尊いと説く。このことは詩の投稿者、初心者だけでなく詩壇にある作品に対しても言えるとする。¹⁷⁾

詩を作るには心の動きに順ふ事が大事であると私は言つた。ところでこの心の動きに順ふことによつて真の発想力が自ら湧き来ることを諸君は経験するであらう。発想力は「我」の呼吸であると言つて可い、この発想力が心から湧いて来て

物を言ふ時には、諸君は初めて自分の存在を信ずるにちがひない。何者が歌ふのでもない。それは自分が歌ふのである。自分の感ずるところ、思ふところ、見たところを歌ふのである。(中略)

言葉の斡旋なども拙なく、たいして思想などを口にせずとも、只何となく物に心を動かして真に歌つた作品は、遙かに尊い。私は毎月雑誌に集つて来る詩の選をしながら然ういふ稚拙の純な作品に接して度び度び心を動かされることがある。またそれと同時に器用に詩を作る才のある人は、言葉で撫でまわしてしまつて少しも身の入らない物を書いている。是等は旨いといふよりも却て厭な心持を起させるのである。

賢治は、岩波茂雄に宛てた手紙(大正十四年十二月二十日)の中で、『春と修羅』の作品を「心象スケッチ」と呼ぶことに關して次のような「心の動き」を述べている。⁽¹⁸⁾

六七年前から歴史やその論料、われわれの感ずるそのほかの空間といふやうなことに對してどうもおかしな感じやうがしてたまりませんでした。…それぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました。…詩といふことはわたくしも知らないわけでありましたが厳密に事実のとほりに記録したものを何だかいままでのつぎはぎしたものと混ぜられたのは不満でした。

賢治は『春と修羅』を「おかしな感じよう」を「それぞれの心も

ちのとほり科学的に記載」「厳密に事実のとほりに記録」した「心象スケッチ」だとする。この考えと類似すると思われるものが、先にあげた露風の詩論にある、詩作は「心の動きに順ふことが大事」「自分の感ずるところ、思ふところ、見たところを歌ふ」とする考えである。露風は、このような詩論で賢治の作品を読んだのではなからうか。「心象スケッチ」とは、端的に言うところの心の働き(心象)の記録(スケッチ)である。しかし、難解である。賢治は「序」で「たゞとにかく記録されたこれらのけしきは記録されたそのとほりのこのけしき」であり、「ある程度までみんなと共通」しているという。近年の賢治研究では、「心象スケッチ」は独自の表現形態であるとされ、また広い宇宙とつながる自分の心を言葉で書き表したと意ともいわれている。

「善い詩情」という理由は明確でないが、その書簡に「詩」とあることは露風も他の同時代の人々と同様に『春と修羅』を詩集として受け取り、その作品を「詩」として享受したことを示唆している。露風は賢治の三篇に何を讀み取ったのか。たとえば『春と修羅』の巻頭にある「屈折率」は、難解な表現はないが科学的で不可解な詩であり解釈が分かれている。タイトルの「屈折率」は科学用語である。描かれているのは岩手山のふもとにある「七つ森」の風景であるが、不思議な風景である。二つの場所の比較があることは容易にわかる。それは、巨きな明るいと暗いところにあえて背を向けて、凍つたでこぼこの雪道を踏んで「縮れた亜鉛の雲」に覆われた方向に向かうとある。二つの場所は、作者の心象と現実の対比とも解されている。最後には「陰気な郵便脚夫」と「アラッディン、洋燈とり」(アラジンのランプを手に取っている者)との比喩的対比もある。

露風は賢治の作品に「おかしな感じよう」をスケッチした独自の感情と不思議な感覚を、いわゆる「心象スケッチ」を感じ、心を動かされて「善き詩情」と賞賛したのではなからうか。

五 『春と修羅』の最初期の評価

ところで『春と修羅』の作品は、他の人々にどのように評価されたのだろうか。そこで『春と修羅』が刊行された大正十三年の露風と同時代の評価を発表順に確認してみたいと思う。

歌人の尾山篤二郎は、賢治の詩に「不思議な感覚と感情」と、ダイヤモンドという新しさを読み取る。¹⁹⁾

所謂心象のスケッチは、私に対してはかなり立派な詩である。読んでみると変な虫惑を感じ、著者の不思議な感覚と感情の頂点を数歩する。

(「蠅虫舞手」の作品を取り上げて)

この詩はダダだ。(中略)ダダとしても今世に云はる、が如き附焼刃のダダではない。

尾山の評について構大樹は、表現レベルでダイヤモンドに新しさという価値を見出して評価することに慎重であるが、次のように解説している。²⁰⁾

『春と修羅』の『詩』は本物の『ダダ』であるがゆえに、従来の評価軸では測れない価値を秘めている、ということだ。この評言は『春と修羅』の価値を、ダイヤモンドが帯びていた

芸術にとつての「新しさ」という意味で表そうとしていると考えられる。

また、評論家・翻訳家・思想家であり、日本におけるダイヤモンドの中心的な人物の一人であった辻潤は「惺眠洞妄語(二)」において、高く評価した。²¹⁾

この詩人はまったく特異な個性の持ち主だ。芸術は独創性の異名で、その他は模倣から成り立つものだが、情緒や、感覚の新鮮さが失はれてゐたのでは話にならない。

辻も賢治の詩の「特異な個性」「情緒や、感覚の新鮮さ」を読み取り、従来の詩の評価軸では測れない価値があると評価した。後に賢治は、辻が中心になって創刊した思想雑誌『虚無思想研究』に、「冬(幻聴)」(大正十四年十二月)や「心象スケッチ朝食」(大正十五年二月)を投稿している。ちなみに、この『虚無思想研究』編集兼発行人は『春と修羅』を発行した神田古本屋店主の「ケチネ氏」こと関根喜太郎である。

続いて「門外漢」と称する「紅羅宇」は、『春と修羅』の詩における形式上の「失敗」が看取されること、内容的には「真面目に率直」なことを指摘する。²²⁾

たゞ『率直な行き方』といふ事を感じた自由詩形の陥りやすいリスムの『整』では随分話も失敗したと小曲詩人の先輩が云ふ言葉でこの失敗は此の詩集にも可成りにある併しそれは

とがむべきではない。(中略)真面目に率直に心象をあらはしている。

さらに詩人の佐藤惣之助は、『春と修羅』を「僕は十三年度の最大収穫とする」と高評価を与え、その詩の表現における新しさについて次のように述べている。²³⁾

それに「春と修羅」。この詩集はいちばん僕を驚かした。何故なら彼は詩壇に流布されている一個の言葉も所有してゐない。否、かつて文学書に現はれた一聯の言葉をも持つてはゐない。彼は気象学、鉱物学、植物学、地質学で詩を書いた。奇厘、冷徹、その類を見ない。

このように『春と修羅』が刊行された大正十三年には、従来の詩の規範を逸脱する、いわゆる「新しさ」が評価された。それは「不思議な感覚と感情」「特異な個性」を有し、「情緒や感覚の新鮮さ」「言葉」(詞藻・語句)の新しさを持つという特徴を読み取つてのものである。

露風は『春と修羅』の詩の形式で書かれた「序」にある賢治の「自分といふ者」の認識について「善い賞讃を惜しまぬ者」とし、冒頭の「詩」三篇をあげて「いづれも善い詩情を有つている」と評価した。だが献本のお礼状であり、先にあげた同時代評のように詳しく記してはいない。おそらく「序」にある賢治の文学に対する主張、姿勢や考えが作品に現れていることを読み取っていたのであろう。

六 三木露風と宮沢賢治の共通性・着想の近似性

何の繋がりが無いと思われていた露風と賢治は、露風の賢治に宛てた書簡控えの存在により意外な縁で結ばれていたことが明らかになった。

実は、露風と賢治には、共通点があった。まず思いつくのは、二人とも「宗教詩人・作家」である。しかし二人は「テレーズを愛した」ことでも共通するのである。

マリー・フランソワズ・テレーズは、フランスに生まれ十五歳でカルメル会修道院に入り、一八九七(明治三十)年に二十四歳で亡くなった修道女である。一九二五(大正十四)年に聖者に列せられ「聖テレジア」と呼ばれた。

テレジアの自叙伝は、亡くなった翌年の一八九八年にフランスで『ある靈魂の物語』として出版された。日本においての自叙伝は大坂カトリック教会のシルベン・ブスケ神父によって邦訳され『小さき花 乙女テレジア之自叙傳』の書名で、一九一(明治四十四)年に発刊されている。その後、版を重ねて昭和二十年代まではこのカトリック教会の書架でも見受けられ、ベストセラーだったという。

三木露風がテレジアを知ったのは、一九二五(大正四)年の夏、トラピスト修道院に留まっていた時、修道女の望みがかなった妹をトラピスト天使園(女子修道院)に連れて来た、聖若瑟(ヨゼフ)教育院に勤める温厚敬虔な青年から贈られた『小さき花』による。露風の心がすぐにテレジアに捕えられたことは『修道院の雑筆』(大正十四年八月)の「聖小さきテレジアの詩」に、次のように記している。²⁴⁾

その妹と同じ童貞女であった、幼き耶蘇のテレジアの自叙伝をその杉山国司君が余に贈ってくれたのであった。余はそれから聖小さきテレジアの立派な行爲に対して深い感興を抱くやうになり、その詩の歎称者となつた。

小さきテレジアは神の奉仕者として又人として、柔らかい布で包んだ玉のやうな美德を具へてをつた。(中略)幼年時代を回想して記した中に、「吁壮大な海の景色、夕映えの見事さ、私は永くく、此金色の光線の痕を賸めて……」とかいふ文字がある。其處には宗教的情操が詩的創造力と混じて表はれてゐる。

『小さき花』を読んだ露風は、テレーズの「宗教的情操」「詩的想像力」「人徳」に感動して一九一八(大正七)年に「聖小さきテレジアの詩」を書いたのである。それから数年後にトラピスト修道院の講師として赴任、一九二二(大正十一)年に洗礼を受ける。一九二八(昭和三)年には、テレジアを讃美する歌集『小さき花を讃美する歌』のために作詩をした。その歌集を作ったのは三人、作曲は元イタリヤパルマ音楽学校教授のチマッティ神父、訳者兼発行者は自叙伝『小さき花』の翻訳者のブスケ神父、作詩は詩人三木露風である。発行所は西宮市の夙川天主公会である。詩は「小さき花よ」「聖テレジアに祈る」「テレジアの御恵み」「聖女テレジア伝」「テレジアの伝」「愛の山路」「子供のため」「聖女小さきテレジアに」の七篇である。ほかには、「修道生活の模範」(『修道院生活』大正十五年)に「修道女の模範とすべきもの」として、詩を以て天主を讃美した聖小さきテレジアのことを書いてゐる。

これらの著作によると露風は、聖女テレジアの信仰生活や聖徳・教えなど、自叙伝により十分理解し、テレジアの詩に共感してゐたと思はれる。二十四、五歳頃の露風は「苦がい懷疑と共に」沼津では公会、京都では僧房生活をするなどさすらつてゐた。そこでトラピスト修道院のことを知り修道院生活を送ることになった。テレーズは、異文化に育つた露風、キリスト教をまだ十分に知らない露風の心を捕え、カトリックの道へと導いていったのである。

この「聖女テレジア」は、露風より七年後の一八九六(明治二十九)年に岩手県花巻に生まれ、一九三三(昭和八)年に亡くなつた宮沢賢治の作品にも登場する。

浄土真宗の家庭に育つた賢治は、宗教に深い関心を寄せていた。しかし貧しい人々の苦しい生活を目の当たりにして、現実世界における菩薩行を実践することを説く日蓮宗に改宗する。生涯は、熱烈な法華経信仰に生きた詩人として有名である。

賢治は、一九〇九(明治四十二)年、十三歳で盛岡中学に入学、盛岡高等農林学校を経て農林学校研修生を修了する一九二〇(大正九)年五月、二十四歳までの十二年間盛岡に住んでいた。この盛岡学生時代に仏教とキリスト教に関心を持ち始め、盛岡天主公会や盛岡浸礼教会を時々訪れるようになる。そこで交流を持ったプジェー神父やタッピング牧師・夫人などを短歌や詩に詠んでゐる。プジェー神父は芸術家肌で賢治と同じ浮世絵収集家であり、賢治は神父に浮世絵を贈るなど個人的な交流があつたといわれている。タッピング牧師には、盛岡中学で英語を教わり、高等農林学校一年の時は聖書講座を聴講したという。

賢治とテレジアとの出会いは、この学生時代のプジェー神父との

関りを通して知ったと考えられる。一九一一（明治四十四）年に出版されたブスケ神父訳『小さき花』は、多くの宣教師に知られ教会にも置かれていた。おそらく賢治は『小さき花』を手に入れて読み、テレーズの生き方に共感したのである。その入手の時期は明確ではないが、一九二五（大正十四）年の十一版から一九二九（昭和四年）年十一月の十五版までのものを読んだと推定できる。²⁶⁾

賢治におけるテレジアは、「十三歳の聖女テレジア」として詩の「装景手記」ノート、「装景家と助手との対話」（昭和二年六月一日）、「装景手記」（昭和二年～昭和四年）、「歌壇工作」（昭和六年）に登場する。また、テレジアの自叙伝『小さき花』は、花鳥童話に多くの投影がなされている。なかでも「よだかの星」「ひのきとひなげし」「ガドルフの百合」に大きな影響を与えていることが指摘されている。²⁶⁾賢治と聖女テレジアとの関りについて初めて注目した上田哲は、詩「装景手記」との関係について次のように述べている。²⁷⁾

賢治が「装景手記」の中に〈小さき聖女テレジア〉の名を入れたのは、何かの機会にそれを知ってたまたま使ったという程度のことではなく、ブスケの『小さき花 処女テレジアの自叙伝』などを読み、この聖女の生涯を知り、幼児のごとき心をもつて神を求めるテレジアの精神が、自ら行い努めていた菩薩行、すなわち聖行・梵行・天行・嬰兒行・病行の五行中の特に嬰兒行と通じることを発見、共感を覚え、その幼児のごとき清純な姿が強く印象され、その結果がこの詩句となったのではなからうか。賢治自身の生活態度、「虔公園」「雨ニモマケズ」などのテーマには、この小さきテレ

ジアの幼児の道、菩薩の嬰兒行の精神に相通じるものが見られる。このような賢治が、カトリック教会との接触のなかでリジューの聖テレジアを知り彼女に関心をもったという考えは、そう無理なことではないと思う。

この「嬰兒行」と「幼子の道」の関りから伊従信子は、賢治とテレーズ（テレジア）の出会いについて「心の深みでの出会い」と説いている。²⁸⁾

青年時代に法華経を中心とする信仰に入ってから、彼は「菩薩行」の実践に努めていました。菩薩五行の一つに「嬰兒行」という修行があります。「自分の能力、智力などを外にあらわさないで、自分を嬰兒のような者として仏道を求める行」。ここに「幼子の道」を生きたテレーズと菩薩行中の嬰兒行を実践しようとする賢治との出会いがあったにちがいありません。ひたすら神を父と信賴し、幼児の心を持ってそのみ手に自分を委ねるテレーズの生き方「幼子の道」に、彼は自らおこなう努めていた菩薩行と通じるものを発見し、心の深みで共感を覚えていたのでしょうか。

詩人・作家としての露風と賢治は、ほぼ時を同じにしてテレジアの自叙伝『小さき花』と出会った。露風は、宗教詩人、カトリック信仰をしたことで知られている。一方の賢治は、法華経を信仰したことで有名であるが、キリスト教の影響を受けた作品も多い。いわゆる宗教詩人である二人は、『小さき花』と出会い、そこに描かれ

ていたテレジアの生き方に、心の深みで共感を覚えテレジアを愛した。そして二人はテレジアの「詩」を詠んだ。

その意味で露風と賢治は、キリスト教の深い精神性のところで交流していると言えよう。

おわりに

露風と賢治との交流があることは、露風の賢治宛の書簡控えが確認されるまで知られていなかった。本稿では、賢治から献本されたお礼として書かれてある『春と修羅』の評価を手掛かりに二人の文学的交流関係を明らかにした。

ここ至って、賢治はなぜ露風に献本したのかという問題が残った。賢治と交流があつた草野心平や高村光太郎、岩手県の友人藤原嘉藤治や森佐一（惣一）などの勧めも考えられるが確証がない。また、関根喜太郎―尾山篤二郎―歌人尾山の弟子・関徳弥―関徳弥の親戚賢治の人的ラインも確たるものがない。

露風は、一九〇九（明治四十二年）に詩集『廢園』で北原白秋と並び称される名声を得て「白露時代」と呼ばれるほどであった。賢治は、当時すでに名声を得ていた詩人露風の作品や評判に触れていたに違いない。また、トラピスト修道院滞在中に作った「赤蜻蛉」は、一九二一（大正十）年八月号の雑誌『檉の実』に発表、同年十二月には第一童謡集『真珠島』に挿絵入りで掲載されている。

露風と同様に宗教と文学との融合を目指す賢治は、トラピスト修道院の講師として勤め、洗礼を受けた詩人、すでに「宗教詩人」の道歩んでいる露風に畏敬の念を抱いていたのであろう。

露風と賢治の関係に関して、米地文夫の興味深い論がある。²⁹⁾それ

は、北海道の「ハマナス」をめぐるの石川啄木、三木露風、宮沢賢治の関係である。啄木が『一握の砂』（明治四十三年）の「忘れがたき人人」章頭歌（三〇四）で北の浜辺に咲く「濱薔薇」を「はまなす」と詠み、賢治が詩「オホーツク挽歌」（大正十二年）で「はまなす」を「はまばら」と詠む。その間の大正六年に露風の詩「野薔薇」があるという関係である。

露風の詩「野薔薇」は、トラピスト修道院を訪れる道でフランス人の院長と一緒に、院長が路傍の「ハマナス」を見て「この薔薇は美しい」と示した時の印象をもとの作ったとされる。³⁰⁾米地は三人の関係について、次のようにまとめている。³¹⁾

賢治は詩「オホーツク挽歌」で、サハリンのキリスト教的風土を描こうとし、バラとキリスト教の深い結び付きを意識したとき、おそらく露風の「野薔薇」を想起したのであろう。／そして賢治は、啄木の「濱薔薇」（はまさうび）の造語に魅了され、露風の「のばら」という読みを受け継ぎ、「はまばら」という表記を考えたのであった。

露風の「野薔薇」は、一九一七（大正六）年七月に作詩、トラピスト修道院のシャルル・タルシス修道士により作曲されて、九月には『音楽』（八巻九号）に初めて発表された。山田耕作の「野薔薇」は、一九一七（大正六）年八月二十五日に作曲され、広く愛誦されていった。いずれかの「野薔薇」を賢治は知ったのであろう。

賢治が露風に献本したのは、着想の近似性などが見られるように、宗教詩人としての露風の深い精神性に共鳴したからと思われる。

注

- (1) 三木露風、一九二八年九月、「詩壇の隆盛に就て」『詩歌』九卷六号。『三木露風全集第三卷』一九七四年、日本図書センター、所収、九八〇頁
- (2) 森壮巳池、一九八八年、「ケチ」に販売を依頼」『森壮巳池ノート』宮沢賢治ふれあいの人々、熊谷印刷出版部、三三二頁
- (3) 小田光雄 二〇一九年、「関根康喜 関根喜太郎 荒川畔村」『古本屋散策』論創社、九一頁〜九三頁
- (4) 森壮巳池、一九八八年、「古本屋に『春と修羅』」『森壮巳池ノート』宮沢賢治ふれあいの人々、熊谷印刷出版部、三三三頁
- (5) 大岡昇平、一九六七年、「解説」『中原中也全集 第三卷 評論・小説』、角川書店、四一六頁
- (6) 宮沢賢治、一九九五年、「二月九日森佐一あて封書」『新校本宮澤賢治全集 第十五巻書簡』、筑摩書房、二二二頁
- (7) 菊池武雄、一九三四年一月、「賢治さんを想ひ出す」『宮澤賢治研究追悼』、次郎社、二二頁
- (8) 藤原嘉藤治、一九七五年、「春と修羅」にかかずらつて」『校本宮澤賢治全集 第三巻月報』、筑摩書房、五頁
- (9) 一九九五年、『新校本宮澤賢治全集 第十五巻書簡』、筑摩書房、二三四頁
- (10) 一九二四年八月、「図書館報告」『明治大学学報』第九十三号、五二頁
- (11) 山内修編著、一九八九年、「春と修羅」と『注文の多い料理店』刊行の意図」『宮沢賢治 年表 作家読本』、河出書房新社、一〇一頁
- (12) 三木露風、一九一三年「冬夜手記」『白き手の獵人』、東雲堂書店。『三木露風全集第一巻』所収、一九七二年、日本図書センター、一〇七頁
- (13) 萩原朔太郎、一九一七年、「月に吠える」、感情詩社・白日社出版
- (14) 『新校本宮澤賢治全集第十六巻（下） 補遺・資料（年譜篇）』一八七頁
- (15) (9) に同じ
- (16) 三木露風、一九二五年、「自由詩運動の最初」『詩歌の道』、アルス。五〇頁〜五一頁
- (17) 三木露風「詩を作る年少の友」前掲書、一一三頁
- (18) (9) に同じ
- (19) 尾山篤二郎、一九二四年六月、「最近の書架から」『自然』第三巻四号、五一頁〜五二頁
- (20) 構大樹、二〇一九年、「宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか」、大修館書店、三〇頁
- (21) 辻潤、一九二四年、「情眠洞妄語（二）」『読売新聞』七月二三日付朝刊
- (22) 紅羅宇、一九二四年、「詩集『春と修羅』」を見て義理にも一言」『石手日報』九月一八日付朝刊
- (23) 佐藤惣之助、一九二四年二月、「十三年度の詩集」『日本詩人』第四巻二二号、九五頁〜九六頁
- (24) 三木露風、一九二五年、「聖テレジアの詩」『修道院雑筆』、新潮社、一四一頁〜一四二頁。のち『三木露風全集第三巻』所収、一九七四年、日本図書センター
- (25) 拙稿、二〇〇四年三月、「賢治と十三歳の聖女テレジア」『日本大通信教育部研究紀要』十六・十七合併号、一〇一頁〜一〇二頁
- (26) 伊藤博美、一九九八年八月、「水汲み」の源流（下）」『賢治研究』七六号。大塚常樹、一九九八年、「聖テレジア『小さき花』と『ひのきとひなげし』」『宮沢賢治 心象の記号論』、朝文社など。
- (27) 上田哲、一九八五年、「宮沢賢治 その理想世界への道程 改訂版」、明治書院、二二七頁〜二三八頁
- (28) 伊従信子、二〇一〇年、「テレーズを愛した人びと」、女子パウロ会、一一四頁〜一一五頁
- (29) 米地文夫、二〇一〇年九月、「啄木の濱薔薇に始まる花綵を辿る」露風から賢治へ、そして・・・」『国際啄木学会盛岡支部会報』第一九号、二五頁〜三一頁
- (30) 三木露風、一九一七年、「大正六年七月一四日付」灰野庄平宛書簡「トラピスト修道院より」『未来』三巻八号、八月九日
- (31) (29) と同じ

謝辞

本研究は、JSPS科研費JP2000297の助成を受けた研究成果である。研究課題名は「三木露風の未公開資料の公開・整理及び基礎的研究」である。記して感謝申し上げる。並びに、貴重な所蔵資料を提供して下さった公益財団法人童謡の里龍野文化振興財団「霞城館」に感謝申し上げる。

付記

科研費による研究成果の一部である、三木露風と宮沢賢治の生前交流を示す新資料（書簡控え）の発見について、「神戸新聞」（二〇二一年八月二三日朝刊第一面・社会面）、「岩手日報」（八月三一日朝刊）、「NHK神戸放送局 Live Loveひょうご」（二〇月八日）、「読売新聞」（二〇月一七朝刊）で掲載・紹介された。なお、書簡控えは、「霞城館」で公開されている。